

西川伸一の オススメシネマ③

パターソン (米 2016 年)



劇場内の席に座って予告編を観ながら、作品への期待を高める。どんな感動が待っているのだろう、どんなどんでん返して「裏切られる」のだろうかなど。今回紹介する『パターソン』は感動して涙が止まらなくなる映画ではない。『シヨーションクの空に』のような大どんでん返しがあるわけでもない。しかし、こんなに穏やかで心が癒やされる映画もあっていい。だれ

にでもある「終わりになき日常」を淡々と丁寧に描いている。細かな伏線の数々が爆笑ではなく微笑を誘ってくれる。

米ニュージャージー州パターソン市でバスの運転手をしている、その名もパターソン（アダム・ドライバー）がこの映画の主人公だ。月曜日の朝ベッドから起きるパターソン夫婦のシーンからはじまり、一週間後の朝の同じシーンで

終わる。同じシーンといっても、起きる前の寝相は毎朝違うわけだから、写真のようになる。

パターソンは六時から六時半の間に起きて、一人でコーンフレークの朝食をとる。平日は歩いてバスの車庫に向かう。出庫までの待ち時間に詩作に耽ってそれをノートに書き留める。

満島ひかりにちよつと似ていてかわいい妻ローラ（ゴルシフテ・ファラハニ）は専業主婦で、「天然」が相当入っている。内装に凝つたり妙な服装をしたり、いきなり通販でギターを買ったりと奔放な行動をとる。

料理の腕は今ひとつだが、マフィン作りはうまい。パターソンはそのすべてをやさしく受け入れる。

二人の間に子どもはいないが、小さなブルドッグのマーヴィンを飼っている。夕食のあと、マーヴィンを散歩に連れ出すのがパターソンの日課だ。途中にあるパブでビールを一杯ゆつくり飲むのが彼のひそかな楽しみである。バスの車内で聞こえてくる客同士の会話やパブで練り広げられる悶着などが、パターソンの詩作の糧になっている。

実はパターソンは痛恨のミスをしていた。せっかくの詩作ノートのコピーを取っていなかったのだ。それを心配したローラに週末に必ずコ

ピーを取ると約束させられる。夜に二人はお祝いの映画鑑賞に出かける。帰ってくると、詩作ノートが散り散りされている。マーヴィンの仕業だった。自室にしまわずリビングにうっかり放置したのが運の尽きとなる。ローラはお仕置きにマーヴィンをガレージに閉じ込めるという。だが、パターソンは感情を露わにせず静かにやり過ごす。

日曜日、そのマーヴィンを連れて郊外に散歩に出かける。そこで永瀬正敏扮する日本人の詩人と出会う。詩人同士の禅問答のような話がおかしい。永瀬は日本語で書かれた自分の詩作ノートをみせる。怪訝な顔をするパターソンに、「詩の翻訳はレインコートを着てシャワーを浴びるようなものだ」と説明する。パターソンはその変わった比喩にほほえむ。

そして次の月曜日の午前六時過ぎ。いつもの一週間がまたはじまる。

ところで、洋画の字幕が画面の下に出るようになったのはいつからなのか。前席の客の頭が邪魔で読むのにいららする（特にここは！）。かつてのように画面の左右に出してほしい。

（八月三〇日・新宿武蔵野館）

（にしかわ・しんいち／明治大学教授）